

観光まちづくりレポート

古代『下つ道』、中世『中街道』の面影を残す

～奈良県田原本町～

近畿地方最大の弥生時代の遺跡「唐古・鍵遺跡」で有名な田原本町は、奈良盆地のほぼ中央に位置することから、大和古道のひとつ「下つ道」、また、中世以降は「中街道」が縦貫し、さらには大和川水系の水運にも恵まれ、諸方の人々と物産が交わる交通の要衝であった。

江戸期には、賤ヶ岳七本槍の一人として勇名を馳せた平野氏が領主となり、陣屋町、寺内町として町並み整備が進み、問屋が中街道に沿って軒を連ね、「大和の大坂」と呼ばれるまでの経済的な発展を遂げた。明治・大正期以降も繁栄が続いたことから、町並みは、江戸期から昭和初期の町家が点在する一種レトロな雰囲気感を漂わせる独特の美しさを持っている。

古代からの街道の町として

奈良県磯城郡田原本町は、昔から「国中（くんなか）」と呼ばれる奈良盆地のほぼ中心に位置し、そのため国中の「へそ」ともいわれる。

同町大字唐古から鍵にかけては、約2,000年前に栄えた近畿地方最大の弥生時代の遺跡で国指定史跡「唐古・鍵遺跡」が確認されており、古くから経済力に富んだ地域であった。

7世紀の古墳時代には、奈良盆地の東側を南北に並行して縦貫する「上つ道かみつみち」、「中つ道なかつみち」、「下つ道しもつみち」、いわゆる大和三道が整備されたが、田原本は、このうち「下つ道」が縦貫する交通の要衝であった。

奈良時代には、飛鳥・藤原京から奈良・平城京に至るこの大道は大いに栄えたが、平安京遷都後には奈良の中心部も様変わりし、やや東側へ移ったことから、中世以降は「下つ道」もやや東にずれ、奈良から今の天理を経て桜井に至る「上街道」、大和郡山から大和高田に至る「下街道」に対し、田原本を縦貫するこの道は、その間を通る「中街道」とよばれ、依然として重要な交通路であった。

陣屋町・寺内町としての町並みの整備

今の町並みが形成されるのは、豊臣秀吉の家臣で賤ヶ岳七本槍のひとり平野長泰が田原本に領地を拝領してからである。

長泰が領主となった際に教行寺を田原本に招いて寺内町を建設、後に子の長勝は陣屋町を造ったが、さらに、領有権の問題で教行寺が田原本を去った跡地に本誓寺や浄照寺が建立され、寺内町の姿を今に残している。



弥生時代の「楼閣」が復元された唐古・鍵遺跡

また、田原本は大和川の上流である寺川に接することから、瀬戸内、大坂との水運も活発であった。そのため、中街道に沿って問屋が軒を連ね、近世には「大和の大坂」と呼ばれるまでの発展を遂げ、「陸の堺」と称される今井町（橿原市）に匹敵する経済力を誇った。

町並は細長い碁盤目状の道であるが、陣屋町の名残で、各所で折れ曲がったり、T字型の三叉路になった外敵の侵入に備えての造りである。

そして、明治維新後には、大名の消滅とともに、大名貸しで栄えた今井が住宅の町に変貌する一方、田原本は商業機能がますます活発になった。

レトロな雰囲気感を醸し出す独特の町並み

現在の田原本の町並を歩くと、伝統的な商家の建物は、入り母屋造りの建物が比較的多いが、これは明治期以降も続いた繁栄のたまものといわれている。

江戸期に多い中二階建ての建物が少なく、総二

階建てに入母屋造・塗籠^{ぬりごめ}の明治以降の建物への建て替えが進められ、その中に昭和初期のレトロな建物も混ざって、独特の雰囲気を醸し出す町並みが広範囲に残っているのが田原本の魅力である。

大正7年には大和鉄道（現：近鉄田原本線）が、同12年には大軌電車（現：近鉄橿原線）が開通し、2本の鉄道が通るといって、近代の交通網にも恵まれ、駅前には映画館や飲食店が並ぶ商店街で賑わいその名残が今も残る。

そして現在、近鉄田原本駅西側では再開発が始まり、一方、東側に当たる中街道沿いでは、田原本の歴史を今も物語る古くからの町並みが姿をとどめているが、この地域でも高齢化が進み、普段は人が住まない低利用の古民家が表れ始めている。

町家・町並み保全に向けた取り組みが始まる

定住者を失った古民家は、取り壊されて空地や駐車場となるケースも多く、町並みの景観を損ない、ひいてはまちのコミュニティの崩壊にもつながりかねない。

そのなか、中街道沿いで、損傷の激しい竹村家住宅が国の重要美術品の指定を受けていることがわかり、あらためて、古くからの町並みの価値が認識されることとなった。

この指定制度は、昭和25年に現在の文化財保

護法が制定された以前にあった同様の制度で、美術的な価値の高い文化財に重要美術品の指定が行われていたものである。多くは、新しく重要文化財の指定等に移行されたが、移行されなかったものは旧来の重要美術品の指定が引き継がれるものとされた。

古代の下つ道、中世以降の中街道が町の中央部を南北に通る由緒のある街道筋。それに沿って問屋や商店が形成され、特有の景観を醸し出してきたが、町の歴史・文化ともいえる景観も、このままでは、いずれ損なわれるとの危機感もあって、町の人々の間に、新しいまちづくりにその歴史的なまちなみを活かしたいとする思いが高まっていった。

「田原本・まちをすきになる会」の発足と「なら・まちづくりコンシェルジュ」との協働

町内で竹村家住宅の保全についての機運が高まる中、町内で事業を営み、奈良県の文化財保護指導委員も務める中西秀和氏は、町内の明治期以前から昭和初期にかけての建築物を調査し、50数棟が残ることを確認。奈良県が土木部内に新たに組織した「なら・まちづくりコンシェルジュ」に建築物の保全と組織作りについてアドバイスを要請した。

「なら・まちづくりコンシェルジュ」とは、県

民によるまちづくりを支援するため、積極的にまちづくりの現場に飛び出し、地域に合った情報を幅広く提供し協働を行っていること、奈良県が2007年に設置し、土木部内に事務局を置く組織である。

その支援のもと、「竹村家住宅」の保全、NPOや任意団体としての組織の立ち上げ、さらには、まちづく



りマップの作成、ワークショップの開催などの検討が進められた。

そして、2009年1月、12名の発起人が集まり「田原本・まちをすきになる会」が任意団体として発足。町長やライオンズクラブ会員の他、町内に影響力のある人々が相次いで結集し活動が本格化した。

また、県のまちづくり組織サポート事業である「町家等地域資源発掘・発信事業」の2010年度の対象先に選定され、大学、研究者を交えた研究会の設置、地域資源・町並みの調査と活用、商店街とともに活性化への行事拡充などの事業に取り組んでいる。

その一環として、まちづくりマップが作成され、続いて奈良女子大学増井教授のもとでの建物調査が今年8月から9月にかけて行われ、調査結果が待たれているところである。

まちづくりマップでみる田原本寺内町・陣屋町

「田原本・まちをすきになる会」と「なら・まちづくりコンシェルジュ」の協働で作成されたまちづくりマップをみると、寺内町、そして一大商業地として発展し、今も魚町、茶町、市町などの往時を偲ばせる町名を留め、田原本独自の町民文化を伝える様子が見えてくる。

■鏡作神社（大字八尾）

祭神は天照国照日子火明命、石凝姥命、天兒屋根命で、この地は古代に鏡鑄造の集団がいたとされ、神宝として「三神二獣鏡」を所蔵する。

■津島神社（大字祇園町）

祭神は素戔鳴命、櫛名田姫命、蒼田別命、天兒屋根命などとなっているが、本来は牛頭天王を祭神とする田原本の産土神であったと考えられる。

古くは祇園社といい、現在も夏に盛大な祇園祭が催されることから、地元では「祇園さん」の愛称で親しまれている。

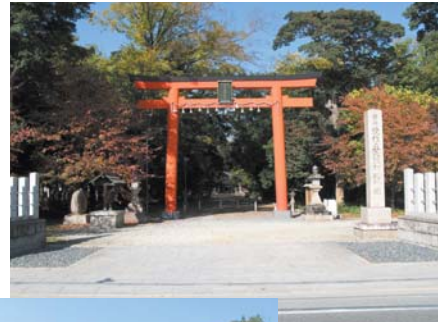
祇園祭は、「大和の大坂」と呼ばれるほどの豊かな財力をもとに、古くから盛大に行われてきており、いまも中和地方一の夏祭りとして、近隣各地から集まった人々でにぎわう。

■本誓寺（大字茶町）

江戸時代の田原本領主であった平野氏の菩提寺。二代領主平野長勝が、慶安4年（1651）に建立した。

本堂は度々の火災を受け、現在は昭和58年に

鏡鑄造の神様を祀る鏡作神社



「祇園さん」として親しまれる津島神社

材木町界隈の町並み



本誓寺・浄照寺が並ぶ寺前通り

鍵岡分家は天保12年（1841）頃の建築



損傷の激しい竹村本家住宅

再建された鉄筋コンクリート建物である。本尊は、阿弥陀如来立像で鎌倉時代後期の作。他に、平安時代中期の十一面観音立像が安置されている。

■浄照寺（大字茶町）

浄照寺は、平野長勝の創建と伝えられ、木造阿弥陀如来立像（江戸時代前期）を本尊としている。寺宝として親鸞上人画像があり、大谷本廟に安置されていたものを本願寺から下付されたといわれる。

主な建造物には、本堂・庫裏・鐘楼・太鼓楼・表門がある。このうち表門は、伏見桃山城の城門を移築したものと伝えられる

本堂は、慶安4年（1651）に建立された入母屋造本瓦葺の建物で、組物、欄間、^{かえるまた}募股等に優れた彫刻技法が残り、県下における大規模な真宗寺院本堂の典型として価値が高く、県指定文化財である。

■南町通り

明治期半ば築の八倉家住宅を核に、檀原市方面から田原本に入る中街道沿いに続く町並みで、平野氏陣屋町の構築の際には、防御上の関係から街道は鍵形に折り曲げられている。

■材木町～市町界隈の町並み

^{そてうだつ}袖卯建（本来は隣家との防火壁だが徐々に家格を示す装飾的なものに変化）、丸窓、虫籠窓（格子状の壁に覆われた窓）など意匠を凝らした店舗などがあり、和洋折衷の外観が独特のレトロな雰囲気醸し出している。

村田家は18世紀後半頃の建築、鍵岡分家は天保12年（1841）頃の建築で、風情のある町並みの一角を形成する。

■寺前通り

寺内町の核となる、浄照寺（浄土真宗）、本誓寺（浄土宗）が立ち並び、堂舎の構えが映える美しい舗装が施された門前の通り。

■新町町並み

江戸初期に中街道筋に開かれた町並み。竹村本家は戦国末頃からの名主の家柄で、数寄屋風書院が桃山時代の様式を今に伝える。傷みが激しく、修理が急がれており、町内で町家保全の機運が高まった一因となっている。

多様な地域団体との協働

田原本には、弥生時代、古墳時代から近世、現代に至るまでの多様な文化が集積している。

桃太郎物語の主人公の有力説として、第7代孝霊天皇の皇子吉備津彦命があるが、孝霊天皇の^{きびつひこのみこと}廬戸宮は同町大字黒田に営まれたとされることから、桃太郎の故郷としてもアピールされ、また、能の最古流派である「金春」、最大流派の「観世」をはじめ、能楽の源流はこの田原本の地にあるとされる。

このような、連綿と続いてきた田原本の観光拠点として、2007年11月、田原本駅前に、田原本町観光協会「観光ステーション磯城の里」が完成し、町歩きや田原本町内観光情報の発信を行っている。

この施設は町商工会の空き店舗利用計画の一環として、商店街の活性化を図るため、設置されたもので、同町商工会や自治会、そして行政など、まちづくりを担う人々の様々な活動の拠点でもある。



田原本の情報拠点「観光ステーション磯城の里」

近年、全国各地で古い町家・町並みの価値を見直そうという運動は、様々な人々を巻き込んで活発化している。その背景には、町家・町並みには、地域文化、さらには、現在失われつつある地域コミュニティが付随しているという認識の高まりがある。

田原本での町家・町並み保全の取組みは始まったばかりであるが、時代とともにライフスタイルも変化し、地域に対して誇りを持てる暮らしへのあこがれは強まりつつあり、今後、ますます活動が広がることと思われる。

（山城 満）